

人は何かと出会ったり、発見することで感銘を受けますが、それは美術の作家たちにとっても、創造の原動力となります。北海道の美術も、そうした出会いが幾多の潮流を織りなして、創造の歴史を彩ってきたといえるでしょう。

たとえば、敬愛する師との出会い。1898(明治31)年に来道し、札幌第一中学校(現南高校)で美術教師として長く教鞭をとった林竹治郎に学んだ生徒に、三岸好太郎をはじめ久保、俣野第四郎、長谷川昇、能勢真美など実に多くの「道産子第一世代」の画家や彫刻家があります。なかでも三岸は、若くして独立美術協会で活躍し、1933(昭和8)年に「北海道独立美術協会」の結成

に指導者的立場で参画しましたが、ここに小山昇、植木茂、国松登ら10名が集い、三岸をリーダーとしてさらに北海道の美術の担い手らが育っていったのです。

また、人として示唆を受け生き方に影響を及ぼすという意味で、人生の師との出会いもあります。1907(明治40)年に東北帝国大学農科大学(現北大)の英語講師として来道した有島武郎は、文学者でありまた思想家でもありましたが、その豊かな感性ゆえ美術にも造詣が深く、北大で黒百合会を結成しその活動を通して北海道の美術界に大きな足跡を残しました。その有島の絵に深く感銘を受け、思い切った有島を訪ねたのが木田金次郎でした。その交遊をもとに有島の『生れ出づる悩

み』が書かれ、有島の助言にしたがって終生岩内を離れることなく自然を描き続けました。このふたりの出会いは突出して北海道の美術史を彩っています。

さてこうした良き師と出会い研鑽を積んでいく創造活動のほか、求める表現や活動の在り方を等しくする同志との出会いは、創造活動の幅をひろげます。戦後日本美術を席卷した抽象絵画の隆盛は、その後も表現のありかたを問いながら活動するいくつかのグループを生み出します。「北象会」は、難波田龍起を中心に赤穴宏、小野州一、上野憲男ら北海道出身の抽象画家が東京で1961年に結成した会。ここを舞台に難波田は豊かな詩情と深い思索のこもった表現で3年間にわたる同志との活動を展開しました。

また人との出会いの他に「何を」「どう」表すかといったテーマとの出会い。それこそが独自性や個性を生み出す源となって、表現者と呼ばれる所以となりますが、ここではそのなかでも宿命的ともいえるテーマとの出会いによる作品群を紹介します。偶然、飛行機から見た自然現象に深く感応し、神秘的な虹の連作を描いた岩橋英遠や、ある詩との出会いが以後の創造の軸となった小谷博貞などの表現は、深い感受性を携えた表現者ならではのテーマとの出会いといえるでしょう。

作家をとりまくさまざまな出会い。それは豊かなイメージの源泉。その泉のほつりを歩くように、美術表現をゆったり楽しんでみませんか。



三岸好太郎《道化》1930-31(昭和5-6)年  
愁いを帯びた道化たちは三岸の資質を表す。この連作が二科会の里見勝蔵の目にとまり、三岸も独立美術協会に参画する。



木田金次郎《夏日風景》1930(昭和5)年頃  
印象派風の作風だった有島の影響もみてとれる。有島が亡くなった後、木田は画家として起つことを決意した。



難波田龍起《秋の詩》  
1961(昭和36)年  
工場などの景観を単純化し構成していくことから抽象表現をはじめた難波田は、深い思索から抒情的な空間表現を生み出し、周辺の画家らにも大きな影響を与えた。



岩橋英遠《虹輪(来迎)》1969(昭和44)年  
※表紙図版  
飛行機上での「ブロッケン現象」の神秘的な体験から、一連の虹の作品を描いた。英遠は『虹』と題した文章に、一期一会の出会いを有縁に結びつことの大切さを記している。



小谷博貞《立棺》1968(昭和43)年  
田村隆一の詩「立棺」に受けた感銘が緊張感から、一連の虹の作品を描いた。英遠は『虹』と題した文章に、一期一会の出会いを有縁に結びつことの大切さを記している。